

地域資源管理の仕組みとしてのエコツーリズム ——コウノトリの野生復帰を中心に

菊地 直樹

(総合地球環境学研究所 准教授)

1. はじめに

近年、環境破壊がすすみ危機が深刻化するにつれ、自然の回復と再生が環境政策として位置づけられるようになり(淡路 2006: 3)、自然保護の手法は人為的な介入により何らかの望ましい自然を「再生」する能動的な手法が加わるようになった。2003年に自然再生推進法が施行されて、同法に基づくプロジェクトではないが、2005年の兵庫県豊岡市におけるコウノトリ(*Ciconia boyciana*)の放鳥に続き、2008年には新潟県佐渡市でトキ(*Nipponia nippon*)が放鳥されるなど、絶滅危惧種の野生復帰プロジェクトが相次いで実施されている。

コウノトリやトキといった絶滅のおそれのある野生生物保護は、生息環境のなかで数を減少させている原因を除くことが基本となることはいうまでもない。しかし、数の減少が著しい場合や原因を速やかに取り除くのが困難な場合、野生生物を動物園などの飼育下に持ち込んで、保護する緊急手段がとられることがある。これはあくまでも緊急措置であり、飼育下で保護するのみならず、飼育下で殖やし生息地に戻す「野生復帰」が目標として存在する。そのためには生息地の再生が不可欠である。

日本で野生復帰の対象となる絶滅危惧種の多くは人里の生物であり、再生が目指される生態系や生物多様性は生物間のさまざまな関係にとどまらず、社会関係をも含むきわめて複雑なシステムとして存在する。地域の自然は暮らしと密接に結び

ついており、自然とかかわる営みを通じて文化が形成され、それによって自然が維持されてきた。日本における野生復帰は地域社会における自然とのかかわりの歴史性、生産活動や生業活動と組み合わせた取り組みであり、自然再生と地域再生の両立を目指す「包括的再生」という特徴を有している(菊地 2006; 桑子 2008, 2009)。

野生復帰は包括的な取り組みであるため、ステークホルダーの範囲は地域住民や野生動物、自然環境に関心が高い人々だけにとどまらない。価値や現状認識が多様化し、相反する複数のかかわりが存在することも想定される。そのため、野生復帰を軸に多様なステークホルダーの利益にかなう「地域資源」を創出することが重要な課題としてあげられる¹⁾。

自然再生によって地域の要素が地域資源化されることにより、さまざまなサービスが生まれ、そのことがインセンティブになることにより包括的再生がさらにすすんでいく。このサイクルを形成するためには、自然の利用を単純に禁止してしまうのではなく、利用を管理する視点が不可欠となる(敷田・森重編 2011: 43)。多様なステークホルダーが参加する地域資源管理の仕組みを創出することが重要な課題といえよう。

近年、地域の自然や文化を地域資源化して、観光客の訪問を促すことで地域振興をすすめるとともに、観光からの利益を地域に還元し、資源的価値のさらなる向上と持続的な利用を図る仕組みとしてエコツーリズムが注目されている(敷田ほか編 2008)。本稿では日本における自然再生の先進

図表-1 コウノトリ



図表-2 人とコウノトリ (提供: 西村英子氏)



事例であるコウノトリの野生復帰を題材に、地域資源管理の仕組みとしてのエコツーリズムの可能性について考え、包括的再生の議論を深めることに寄与したい。

2. エコツーリズムによる地域資源管理

環境破壊に対する危機意識の醸成や新たな観光形態の模索、自然環境を活用した地域振興といった動きが折り重なり、それらのニーズに対応する観光形態として、1980年代からエコツーリズムが注目されはじめた。1990年代には世界各地で理論的研究や実践がすすめられ、さらに国連の持続可能な開発委員会が2002年を国際エコツーリズム年と定めたことで、エコツーリズムは持続可能な観光の一形態としてさらに広く認知され、多くの国や地域で取り組まれるようになった。

日本では、1989年に小笠原ホエールウォッチング協会、1996年には西表島エコツーリズム協会、1998年にはエコツーリズム推進協議会が設立されるなど、1990年代に広く実践されるようになった。2003年には環境省はエコツーリズム推進会議を発足させ、2007年にはエコツーリズム推進法が制定された(敷田・森重編 2011: 24-25)。

本稿ではエコツーリズムが自然環境を利用しながら保全・再生する仕組みという視点に基づき、地域社会が自然環境や地域経済などの状況に応じ

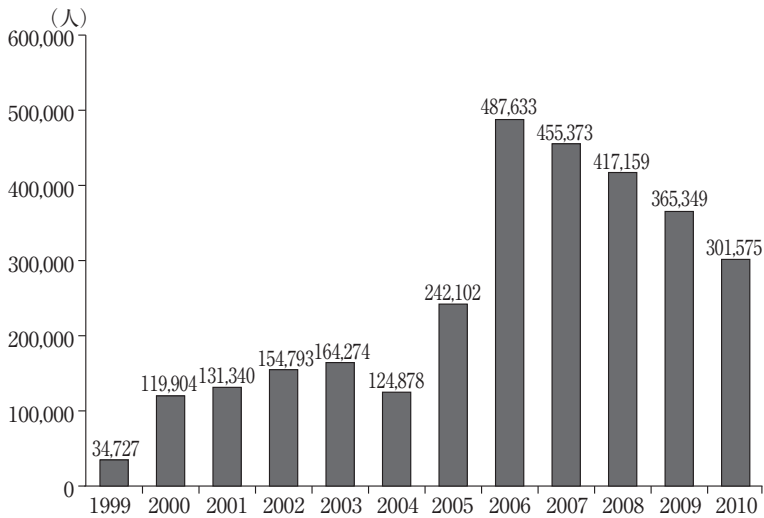
て、環境保全・観光振興・地域振興のバランスを主体的に決定しながら(敷田・森重編 2011: 21)、観光からの利益を地域に還元し、資源的価値のさらなる向上と持続的な利用に向けて管理していくことが重要であると考え。管理が必要となるのは、自然に優しいと考えられるエコツーリズムであっても、自然への影響は避けられないし、観光による地域社会への影響も生じてくるからである。地域が主体的に地域外との互恵的な関係を構築するなかで、保全・再生と活用のバランスをとりながらうまく使い続ける必要がある。

3. コウノトリの野生復帰

本稿で事例として取り上げるコウノトリは、全長が約110cm、翼長が2m前後、体重が4～5kgになる大型鳥類である。形態はタンチョウなどツルに似ているが、分類学上はサギやトキに近い。食性は肉食性で魚類、小動物を餌とし、飼育下では1日500g以上食べている。豊富な餌生物が生息する環境がないと生きられない生き物であり、生態系の状態を表す環境指標になる種である(図表-1)。

主な繁殖地はシベリア東部のアムールからウスリーにかけての湿地帯(主にアムール川流域)であり、中国揚子江周辺とポーヤン湖、台湾、韓国、日本に渡り越冬する。渡り鳥であるが、日本には

図表-3 郷公園来園者数の推移



田園の環境に適応し、留鳥として繁殖する個体群も生息していた。生息数は3000羽程度と推定され、IUCN（国際自然保護連合）のレッドリストでは絶滅危惧種（En）である。ワシントン条約で付属書Ⅰに掲載され、商業取引が原則禁止されている。日本では特別天然記念物（文化財保護法）に指定され、絶滅危惧種ⅠA類（環境省）に分類されている。

コウノトリは水田をはじめ湿地に生息するドジョウ、フナなどの魚類や小動物を餌とし、里山の松の木などに巣をかけていた。コウノトリの生息域と人間の生活域は重複し、人とコウノトリの間には多様なかかわりがあった（図表-2）。しかしながら、自然破壊など人と自然の関係の変化によって、その姿が徐々に消えていき、兵庫県北部の但馬地方の空から最後の一羽が消えた。1971年には日本国内では絶滅してしまった²⁾。

その後の長年にわたる飼育下繁殖や自然再生といった取り組みが実り、2005年9月24日に5羽のコウノトリが放鳥された。その後も放鳥が行われるとともに、野外での繁殖が順調にすすんでおり、2013年5月末現在で豊岡周辺には約60羽のコウノトリが生息している。

コウノトリの野生復帰では、地域のさまざまな要素を地域資源化することで、自然再生と地域再

生の両立を図る包括的な再生が進展している。たとえば、「コウノトリ育む農法」というコウノトリを軸に環境創造型農業³⁾が進展し、コウノトリの餌となる多様な生き物を育むことと安全・安心で高付加価値の米を生産することを両立する取り組みがすすんでいる（西村 2006; 菊地 2010, 2012b）。また2005年の放鳥以降、マスコミ報道件数が飛躍的に増えて、野生復帰の拠点である兵庫県立コウノトリの郷公園（以下、郷公園）の来園者数は40万人前後で推移

し、コウノトリは観光領域における重要な地域資源となっている（図表-3）。コウノトリに関心を持つ多数の観光客が訪問するようになり、地域として観光客とどのような関係を創出していくのかという課題が現出してきた。

生物資源のうちでも、コウノトリのような大型で希少な野生動物は、大型であるがゆえに人目につきやすいこと、希少性自体が資源の魅力になること、希少になったストーリーを創ることができることなどから、資源の状態にかかわらず観光資源化される可能性が指摘されている（敷田・森重編 2011: 35-36）。コウノトリはまさにその一例である。

ただし、ここで対象となる地域資源はコウノトリだけでない。近年、生物多様性とそれを活用する文化と一体となった「生物文化多様性」という概念が提唱されているように（今村ほか 2011: 72）、再生された生息地やコウノトリと共生しようとする人々の営みも含まれるなど広範囲に及んでいる。

4. コウノトリ観光客の特性

筆者は2008年から2009年にかけて郷公園来園者へのアンケートを実施した。結果は菊地(2012a)

で詳しく報告しているので要点だけ述べたい⁴⁾。

来園者の滞在日数は、日帰りと短期の宿泊が半々と短期間の訪問者がほとんどである。出発地は近畿圏からが7割近くを占め、近距離からの来園者が圧倒的に多い。観光目的は周遊観光が半数を占めているが、コウノトリ目的は2割であった。コウノトリを主目的に豊岡市を訪問している人もかなりいることが分かる。

訪問回数は初めての訪問が27%と一番高いが、4～10回目の訪問も22%とリピート率も高い。90%以上が「とても楽しかった」「楽しかった」と回答し、来園者の満足度はとても高く、再訪を希望する人も90%近くと極めて高い。コウノトリがある風景への評価は高い。コウノトリは観光資源として大きな魅力をもっているだけでなく、リピート率が高いことから観光の効果が持続する可能性は高いといえる。ただし、宿泊客が少ないことと、首都圏や中京圏からの来園者が少ないことから、コウノトリは全国レベルでの観光資源とはいえないだろう。

回答者を観光目的別に分析したところ、コウノトリ目的の観光客はリピート率が高い傾向にあるが、阪神都市圏からの日帰りが圧倒的に多く、豊岡市内での消費額は少ないことが分かった。周遊観光客は約15,700円であるのに対し、コウノトリ観光客は3分の1の約5,700円である。コウノトリ観光客の関心はコウノトリに集中しており、地域の他の資源にあまり関心を寄せていないと推測できる。

人間が絶滅させたコウノトリを人間の手で復活させるというストーリーは希少性が高く、魅力ある資源としての潜在性をもっている。野生復帰は地域の自然と文化を見直す取り組みであり（菊地2006）、地域の自然と文化を野生復帰というストーリーによって関連づけることが可能である。そう考えると、コウノトリの野生復帰において利用される観光資源はコウノトリや自然だけでなく歴史や文化など実に幅広い。コウノトリの野生復帰というストーリーを軸に、生物文化多様性といった視点から知的好奇心を満たすサービスを提供する

ことが、観光資源の魅力の向上につながり、地域に経済波及効果をはじめさまざまな効果をもたらすことにつながると考えられる。

この調査から、生物文化多様性の視点からのコウノトリの観光への活用とさまざまな利益を野生復帰の取り組みへの還元を可能とするエコツーリズムを設計し、持続的な地域資源管理の仕組みとして機能させていくことが重要な課題であることが分かってきた。

5. コウノトリ・ツーリズムをつくる⁵⁾

豊岡市は、コウノトリの野生復帰を軸に生物多様性をテーマとしたPR手法やツーリズムへの活用について外部の専門家とともに考える「豊岡取材・ツーリズムプログラム検討会」を企画し、2011年3月にモニターツアーを実施した。名古屋、長野、東京から研究者やジャーナリスト、旅行代理店職員が参加した。当時、郷公園の研究員であった筆者も現地の人間としてツアーに加わったので、その一部を紹介しよう。

まずは野生復帰の拠点である郷公園に向かい、コウノトリを見学した。郷公園はかつての農地と集水域である雑木林を合わせた約165haを敷地とする広大な施設である。コウノトリの公開ケージには、野外に近い環境でコウノトリが飼育されており、すぐ近くでその姿を見ることができる。野生復帰の概要について豊岡市職員から聞いた後、非公開ゾーンでは長年コウノトリの世話をしている飼育員が語り部となり、コウノトリのことや飼育現場の苦労話などに加え、野生復帰の意義などを話してくれた。野生復帰というストーリーの理解がすすんだ。

郷公園がある豊岡市祥雲寺地区は「コウノトリ育む農法」として体系化された環境創造型農業にいち早く取り組んだ地域である。早くから実践してきた地元のリーダーから話を聞いた。2002年にコウノトリの郷営農組合を設立し、コウノトリと共生する農業に取り組んできた。「自分にも孫にも、コウノトリにも安全でおいしい米作りがやりたい」という願いから出発したという。実証圏をつくり、

病虫害の勉強、生き物の勉強、雑草の勉強、水田環境の勉強を行い、効果を確認してきた結果、納得できる栽培体系ができてきた。外部との交流も盛んになり、区民は「水田やコウノトリ」を祥雲寺の宝物と取り上げてくれるようになった。コウノトリの野生復帰を支えている地元農業者の生の声を聞けるのはエコツアーの醍醐味である。

次に豊岡市北部の田結（たい）地区に向かった。目の前に日本海が広がる50戸あまりの小さな集落である。かつては半農半漁の村であったが、現在では水田は放棄され、わずかな畑を自給的に耕作しているのみである。コウノトリが耕作放棄された水田を餌場として利用したことをきっかけに、2008年から地元住民と行政と研究者とNPOが協働で放棄田をコウノトリの餌場とする湿地づくりが進んでいる。

私たちは長靴に履き替えて、さっそく湿地の中を歩きだした。単なる湿地のように見えるところも、地元住民の方や豊岡市役所の職員の解説が加わると、人が手を加え維持管理されていることが分かってくる。所有者が入り組んだ私有地であるが、そのことは関係なく、水が溜まるよう畦を作り湿地を仕切っている（図表-4）。放棄されていた水田はコウノトリが来たことによって、村の共有財産になったかのようだ。赤ガエルの卵塊を数えたり、子どもたちが作った湿地を見たり、生き物を観察したりと飽きることがない。

30分ほど歩いたところで、石が積み上げられている小さな川が目に入った。豊岡市役所の担当者は「小さな自然再生の現場です。こうして石を積み上げることで水が溜まり、後ろの湿地に水が入るようになります。ただ石を積み上げただけでは大水が出ると壊れてしまいます」。そう話すと、川に降り石を積み上げはじめた。参加者も川に入って石を持ち上げ作業に参加した。5分も作業すると、それなりに立派な堰ができ上がり、湿地に水が入り始めた。小さな自然再生を体験したのである。

夜は地区の民宿に宿泊した。地元の食材を食べることも魅力である。田結地区住民と参加者の間

で意見交換会を行った。ツアー参加者が魅力的な資源と感じたのは、語り部といった人、村人が湿地再生をしているというストーリー、石積み、湿地作りといった小さな自然再生の体験、地元の食材などである。地域の人にとって当たり前が存在する湿地の風景は、地域外の人にとっては知らない文化に触れる場であった。

コウノトリが飛んでくる村は、全国的にも希少であるし、コウノトリが飛んでくるよう努力している村もほとんどない。人々の努力そのものが資源といえる。地域が抱えている問題として「どうすれば集落に人が残ってくれるのか。ここがいいというところを積み上げていきたい。もちろん人を呼ぶのとは後継者を作るのは別の問題ですがね」とある地域住民は提起した。「要素はいっぱいある。里山もあれば海もあるし、湿地もある。それをいかに利用するかがよく分からない」と語った。野生復帰というストーリーでつなげた地域資源をどのように外部に伝えることができるのかが課題である。地域の生々しい声を聞き、意見交換できるのもエコツアーの魅力である。

このツアーでは、その他に豊岡市戸島の「ハチゴロウの戸島湿地」と豊岡市出石町の鶴山を訪れたが、紙幅の関係で割愛する。

筆者を含めた参加者は、地域住民や市役所職員、NPO関係者などの解説を通して、コウノトリの野生復帰というストーリーを軸にした生物文化多様性を体験した。観光資源となるものは実に幅広い。こうしたエコツーリズムを創る作業は、地域にとってみれば地域の自然と文化を関連づけ地域資源化する作業である。

コウノトリとともに暮らす環境は、農業者や地域住民、NPOなど地域に根ざした活動をしている人たちによって創られている。この環境を維持し、より再生を進めていくためには、観光からの利益を地域に還元する必要がある。地域への還元には金銭だけでなく、小さな自然再生の作業といった直接的還元、外部からの情報的還元もある。湿地創出作業をしたり、地域住民と外部者との間で意見交換をしたりすることも地域への還元である。コウノトリと共生する地域づくりに向けて、エコ

図表-4 小さな自然再生による放棄田の湿地化



ツーリズムを用いることで地域資源の管理を実現することが求められている。

このツアーで訪問した豊岡市田結地区の小さな自然再生をもう少し詳しく論じることから、エコツーリズムによる地域資源管理について考察をすすめたい。

6. 豊岡市田結地区における小さな自然再生⁶⁾

田結地区は減反政策、サラリーマン化、獣害などによって水田は放棄され、2006年を最後に稲作は行われていない。コウノトリが飛来した2008年5月当時、放棄田はところどころ漏水するなど、かなり荒れていたという。コウノトリの飛来をきっかけに、放棄田を湿地として再生する取り組みが展開するようになった。

手作業やユンボなどを使って、水田のなかに畦を設置し、湿地にしていく。放棄されたとはいえ個人所有地であり、境界線は入り組んでいるが、そのこととは関係なく畦を作っていく。その結果、水が溜まるようになり、ドジョウ、メダカ、ゲンゴロウ、ガムシなどが確認されるようになった。コウノトリ飛来日数は順調に増えている。

湿地づくり作業は「見試し」という考えによって推進されている。スコップや小型のユンボなどを使って、数時間から半日程度でできる作業を行い、修正点があれば手作業などで改良を加える。

図表-5 「案ガールズ」による案内



構造に大きく手を加えるものではなく、いわばスコップ片手で試行錯誤しながらすすめていくのである。

こうした小さな自然再生によって、放棄されていた水田は、コウノトリの生息地という生態学的な機能をもった空間となり、「田結湿地」と呼ばれるまでになった。コウノトリ日役と呼ばれる村人総参加の作業に加え、筆者などの研究者、豊岡市の職員、NPO、ボランティアなどが参加して湿地は整備されている。外部の研究者から「国宝級」と評価され、村人たちの誇りとなっている。

村人たちは、よそ者の力を呼び込んでくれるコウノトリというストーリー性を帯びた生物の力を積極的に活用することで、地域外のさまざまな人や情報、力を呼び込み、村の活力を生み出そうとしている。この意味でコウノトリは村を維持する選択肢といえよう。この小さな村の取り組みは、生物文化多様性を基軸とした地域の再構築の事例と考えることができる。

湿地づくりを持続的な取り組みにしていくためには、いくつもの課題を抱えている。第1に放棄田を湿地にする活動は何らかの経済的な利益を生み出すわけではないことである。第2に作業は肉体労働を伴い、高齢化が進む村にとって負担は軽いことである。コウノトリという新しい選択肢による村の維持は、科学的知識も必要であるし、若い労働力も必要であるため、村人だけでは実現

不可能である。第3に、このように多様な人たちがかわっている、ステークホルダーの管理という新しい課題も現出していることである。コウノトリの湿地という地域資源の持続的な管理を実現していくための仕組みづくりが求められている。エコツーリズムにおいて研究者、行政、NPOそしてエコツーリストとのかかわりは大事であるが、地域外に過度に依存することなく、地域社会の意思を反映できる組織や団体が管理の担い手となる必要がある。

その一例として、女性たちが田結の自然や文化、歴史などを解説する「案ガールズ」を結成し（図表-5）、新たにエコツーリズムに取り組み始めている。湿地づくりが進められるようになって以降、田結地区には研究者や行政関係者など年間数百人の視察者が訪れるようになった。案ガールズたちは、湿地づくりが進む村と一緒に歩きながら、歴史や暮らしの変化、植物や動物、コウノトリ、湿地づくりの取り組みなどを解説する。案内料は一人当たり500円である。観光による湿地づくりの資源化と利益の還元というサイクルを通して、また案内料という形で多様なステークホルダーを管理することで、持続的な湿地づくりに結びつけようとする取り組みである。

ただし、地域として生物文化多様性という資源をどう売り出すのか、研究者を含めた地域外からのステークホルダーの受け入れをどうするのか、地域への還元をどうするのかといった地域資源管理の仕組みづくりは、これからの課題である。

7. 交流の資源化と順応的ガバナンス

最後に、地域資源管理の仕組みづくりについて若干論じることで、本稿を閉じたい。

第1に指摘したいのは、観光による利益の地域への還元である。たとえば、観光による経済効果を湿地再生の担い手に還元し地域資源を管理する仕組みを観光に内部化していくことである。還元することにより生息地の再生がすすみ、担い手が支えられる。その結果、観光資源の価値も向上するとともに、持続的な利用が可能になる。田結

地区における案ガールズは萌芽的な取り組みである。

第2に交流の資源化である。観光が地域にもたらす効果は経済だけではない。観光現象はホスト（観光客を受け入れる社会）とゲスト（観光客）とのかかわりであり（Smith ed. 1991）、観光人類学などでは、観光客が訪れることで、従来は存在しなかった新しい文化が生み出され、それが地域の人の誇りとなり、さらに生活を支える資源となる可能性も見いだされている（玉置 1996）。観光客のコウノトリと共生する地域づくりへの参加意向を調査した浅野らによれば（回答者数520名）、観光客の市民活動への参加意向が高くなっている⁷⁾。労働力不足に悩む地域からすると参加意向の高い観光客は地域資源としての可能性が高い。コウノトリ観光客からすると、コウノトリの野生復帰を支える湿地づくり作業を、この地でしか味わえない資源として潜在的に認識していると思われる。地域と観光客をつなぎ、相互に有用なサービスとなるように転換する、すなわち交流を地域資源化する仕組みづくりが求められている。

利益の地域への還元、交流の資源化という地域資源管理の仕組みづくりにおいて重要となるのが、順応的ガバナンスという視点である⁸⁾。環境社会学者の宮内泰介は「環境保全や自然資源管理のための社会的しくみ、制度、価値を、その地域ごと、その時代ごとに順応的に変化させながら、試行錯誤していく協働のガバナンスのあり方」（宮内 2013: 25-26）と定義している。宮内は順応的ガバナンスのポイントとして、第1に試行錯誤とダイナミズムを保証すること、第2に多面的な価値を大事にし、複数のゴールを考えること、第3に地域のなかで再文脈化を図ることをあげている。

生物文化多様性という概念にみられるように、エコツーリズムの資源は多様性・多元性を有しており、既存の価値と競合する可能性もある。エコツーリズムを地域資源管理の仕組みとして考えた場合、地元住民、NPO、研究者、事業者、行政など多様なステークホルダーが協力して、それぞれの利益にかなうように管理することが重要である。このため試行錯誤と多面的な価値の重視は不可欠

である。田結地区の小さな自然再生では、先述したように、幾つかの課題をかかえているが、見直しという考え方によって試行錯誤は保証されており、コウノトリの生息環境の整備であるとともに、村の選択肢の創出である点で多面的な価値が大事にされている。地域のなかでの再文脈化は、地域が主体となりながらも地域外の多様なステークホルダーが参加する地域資源管理の仕組みを創るために必要な視点といえよう。再び田結地区を例にあげれば、コウノトリの野生復帰という大きなストーリーを村のストーリーとして再文脈化している。

順応的ガバナンスの視点に基づきながら、地域への還元と交流の資源化をすすめていくことが、地域資源管理の仕組みとして望まれるのではないだろうか。今後の研究課題としたい。

注

- 1) 本稿では、地域資源化を地域に存在する多様な要素を選択して働きかけ、活用できるサービスに変換することと定義する(敷田・木野・森重 2009: 68)。
- 2) コウノトリの絶滅要因として①明治期の乱獲による分布域の減少、②圃場整備などによる低湿地帯の喪失や営巣場である松の減少といった生息地の消失、③農薬など有害物質による汚染、④個体数の減少した時点での遺伝的多様性の減少が考えられている。とりわけ農薬の影響は大きかったようだ。いずれも人と自然の関係性の変化によるものである。
コウノトリの野生復帰に向けた取り組みは、菊地(2006)に詳しい。
- 3) 育む農法とは「おいしいお米と多様な生き物を育み、コウノトリも住める豊かな文化、地域、環境づくりを目指すための農法(安全なお米と生き物を同時に育む農法)」と定義されている。
- 4) 調査は慶應義塾大学の大沼あゆみ氏と豊岡市と但馬信用金庫とで実施した。
- 5) この章は、菊地(2011)を加筆・修正したものである。
- 6) 豊岡市田結地区における小さな自然再生の取り組みの詳細については、菊地(2013)を参照のこと。
- 7) 最も支持(「かなりそう思う」と「ややそう思う」の合計)が高かったのは、「コウノトリ観光の良さを人に伝える」(82.7%)で、ほぼ同じ傾向を示したのが「里山や水辺環境づくりの市民活動」(81.1%)であった(浅野ほか 2009: 45-47)。
- 8) 近年、自然資源の管理は「順応的管理」と呼ばれる科学的手法が主流になりつつある。自然資源の動向の予想には科学的な不確実性が伴うため、事前に分かる範囲で調査し、その結果によって計画を立て実行し、その結

果は常に検証し、その結果次第で計画を修正していく。田結地区の小さな自然再生という「見直し」は順応的管理の一例である。

しかし地域資源管理は順応的管理では、不十分であるとの指摘もある。自然だけではなく社会の管理まで視野を広げる必要があるからである。順応的ガバナンスという考え方が登場してきたのには、こうした背景がある。

文献

- 浅野敏久・林健児郎・李光美・塔娜, 2009, 「コウノトリの野生復帰と観光化——来訪者アンケート調査から」『環境科学研究(広島大学大学院総合科学研究科紀要Ⅱ)』4: 35-50.
- 淡路剛久, 2006, 「環境再生とサステナブルな社会」淡路剛久監修『地域再生の環境学』東京大学出版会, 1-12.
- 今村彰生・湯本貴和・辻野亮, 2011, 「生物文化多様性とは何か」湯本貴和・松田裕之・矢原徹一編『環境史とは何か』文一総合出版, 55-74.
- 大沼あゆみ・山本雅資, 2009, 「兵庫県豊岡市におけるコウノトリ野生復帰をめぐる経済分析——コウノトリ育む農法の経済的背景とコウノトリの野生復帰がもたらす地域経済への効果」『三田学会雑誌』102(2): 3-23.
- 菊地直樹, 2006, 『蘇るコウノトリ——野生復帰から地域再生へ』東京大学出版会.
- , 2010, 「コウノトリの野生復帰を軸にした地域資源化」『地理科学』65(3): 161-174.
- , 2011, 「コウノトリ・ツーリズム」敷田麻実・森重昌之編『地域資源を守って生かすエコツーリズム——人と自然の共生システム』講談社, 152-163.
- , 2012a, 「野生復帰を軸にしたコウノトリの観光資源化とその課題」『湿地研究』2: 3-14.
- , 2012b, 「兵庫県豊岡市における『コウノトリ育む農法』に取り組む農業者に対する聞き取り調査報告」『野生復帰』2: 107-119.
- , 2013, 「コウノトリを軸にした小さな自然再生が生み出す多面的な価値——兵庫県豊岡市田結地区の順応的なコモンズ生成の取り組み」宮内泰介編『なぜ環境保全はうまくいかないのか——現場から考える『順応的ガバナンス』の可能性』新泉社, 196-220.
- 桑子敏雄, 2008, 「トキを語る移動談義所の試み——風土のなかの生き物」『ビオストーリー』10: 18-23.
- , 2009, 「制御から管理へ——包括的ウェルネスの思想」鬼頭秀一・福永真弓編『環境倫理学』東京大学出版会, 255-277.
- 敷田麻実編, 2008, 『地域からのエコツーリズム——観光・交流による持続可能な地域づくり』学芸出版社.
- 敷田麻実・内田純一・森重昌之編, 2009, 『観光の地域ブランディング』学芸出版社.
- 敷田麻実・木野聡子・森重昌之, 2009, 「観光地域ガバナンスにおける関係性モデルと中間システムの分析——北海道浜中町・霧多布湿原トラストの事例から」『日本地域政策研究』7: 65-72.

- 敷田麻実・森重昌之編, 2011, 『地域資源を守って生かす
エコツーリズム——人と自然の共生システム』講談社。
玉置泰明, 1996, 「『持続可能な』観光開発——リゾートの
光と影」山下晋司編『観光人類学』新曜社, 66-73。
西村いつき, 2006, 「コウノトリ育む農法」鷺谷いづみ編『地
域と生態系が蘇る水田再生』家の光協会, 125-146。
宮内泰介, 2013, 「なぜ環境保全はうまくいかないのか
——順応的ガバナンスの可能性」宮内泰介編『なぜ
環境保全はうまくいかないのか——現場から考える
『順応的ガバナンス』の可能性』新泉社, 14-28。
Smith, Valenne, L. ed., 1989, *Hosts and Guests: The
Anthropology of Tourism*, Philadelphia: The

University of Pennsylvania Press. (= 1991, 三村
浩史監訳『観光・リゾート開発の人類学——ホスト&
ゲスト論でみる地域文化の対応』勁草書房。)

きくち・なおき 総合地球環境学研究所 准教授。
主な著書に『蘇るコウノトリ——野生復帰から地域再
生へ』（東京大学出版会, 2006）。環境社会学専攻。
(nkikuchi@chikyu.ac.jp)